

NPO 法人 高齢社会をよくする女性の会 会報

No.244 2015年10月発行
NPO法人高齢社会をよくする女性の会
〒160-0022 東京都新宿区新宿2-9-1
第31宮庭マンション802号室
TEL. 03-3356-3564
FAX. 03-3355-6427
郵便振替 00100-0-79477



開会あいさつをする樋口理事長と袖井、沖藤副理事長

—目次—

| | |
|---------------------------------|----|
| 第34回NPO法人高齢社会をよくする女性の会全国大会 in長岡 | |
| 長岡大会を終えて 平石 京 | 1 |
| 記念講演 超高齢社会をどう生きる? 村木厚子 | 2 |
| 鼎談 村木厚子・森 民夫・樋口恵子 | 3 |
| シンポジウム 地域を支えるほら吹き大会 | 6 |
| 第1分科会～第6分科会 | 9 |
| 交流会 | 15 |
| フィナーレ | 15 |
| 本の紹介・事務局だより | 16 |

二〇一五年九月二六日(土)～二七日(日) 於・シティホールプラザオーレ長岡
第34回NPO法人高齢社会をよくする女性の会全国大会 in長岡
長岡大会実行委員長 平石 京

「大介護時代を地域で生きる」安心と覚悟」を掲げて、第34回全国大会を新潟県長岡市で開催、参加者延べ1800人規模の大会を大過なく終了することができました事、関係の皆さま、ご参加の皆さまのご協力のおかげと厚くお礼を申し上げます。



今回の大会は、全体会に講演・鼎談・シンポジウムと盛りだくさんのプログラムでしたし、翌日の分科会も6つの分野を設けました。

樋口理事長から「新潟で全国大会を開いて」とお声を掛けられましたのが、第31回堺大会の年でした。それから3回の先進地の大会に参加、見学をさせていただきながら本腰を入れて計画を始めた時、私どもに知恵を貸し手を貸してくださいましたのが、こぶし園園長小山剛さんでした。この大きなバックの基でスタッフは、様々の高齢者に関わる問題・法令・施設・歴史等を学びながら大会への準備を進めてきたのでした。今年3月、突然の小山さんの訃報に私

どもは驚愕し、一挙に力が抜ける思いをいたしました。小山さんの申し送りの吉井靖子園長のお力を得て、また樋口理事長や東京運営委員会・事務局の方々のご指導もあって、大会を完成させることができましたのでした。

夫々については、分科会の報告を読んでいたかと思いますが、記念講演は、講師の村木様にとっても事務次官最後の記念すべき講演でしたし、女性の生き方等印象に残るお話をくださいました。また鼎談では、長岡市長にとって福祉先進地として、大会題名の大介護時代をこの地で生きられる市政の在りようを語ってくださいました。

シンポジウム

地域を支えるほら吹き大会

コーディネーター 沖藤典子 (本会副理事長)
パネリスト 袖井孝子 (本会副理事長)
河田珪子 (常設型地域の茶の間「うちの実家」代表)
黒岩卓夫 (医療法人社団萌気会理事長)
吉井靖子 (社会福祉法人長岡福祉協会高齢者総合ケアセンターこぶし園総舎施設長)

沖藤 サブタイトルの「わがまちの大自然・自慢からはじまる地域の創生」というのがほらの内容。トップバッターは河田珪子さん。「地域の茶の間」を創ってきた大変な傑物。今日に至るまでの道のりをお話いただきたい。

その場に自分が居てもいいよというメッセージが空気に漂っている空間、それが「居場所」

河田 今の私は、居場所「実家の茶の間・紫竹」をやっている。平成元年に親の介護で大阪から新潟へ来た。私も癌を病み苦しかったが悔いを残さないため決意した。新潟県に助け合いのしくみが一つもないことが分かり自分の人生も大事にしなから介護される側の人生も大事に



できる仕組みを創りたいと有償による助け合いを始めた。ボランティアの芽を摘む気かと誹謗中傷もあったが命のある限り続けようとひたすら歩いてきた。助け合いの事務所を一番初めに利用したのが私で、小さな事務所だったものがいつの間にか居場所になっていった。配食サービスを始めた平成7年に3人の方が亡くなっているのを発見した。

安心して生きていけるためにはとにかく居場所づくりだということで始めたのが地域の茶の間である。

(新潟市がモデルとして2013年に作成したDVDを放映)

沖藤 次は黒岩さん。警女宿の施主の役割で今日は和服でお見えます。

警女さんと警女宿が結ぶネットワーク (警女一行の三味線演奏と門付けのパフォーマンス)

黒岩 警女は、苦勞と差別を強いられている農家の女たちの心と心をつなぐネットワークを編んできた。警女宿はその日だけ許され、若い嫁たちは夜の更けるまで苦しみや悲しみ時には喜びを黙って聴

いてもらった。警女は一夜の宿を心からもてなし、警女宿の人々は、警女を自分たちの身内のように受け入れてきた。この気持ちには、身体の不自由や病で家でのつそりと寝ている人たちと変わりはない。ヘルパー、ナース、医者であっても、その1軒1軒を訪問して傾聴する態度こそ訪問医療、訪問看護、医療での医者と患者との原点だと思う。

良寛さんに見る看取り

黒岩 看取りを脳梗塞で右片麻痺になった65歳の女性に絵に描いてもらった(絵をスライドで紹介)。良寛は天保2年、74歳で直腸癌で亡くなった。貞心尼は恋人と言ってもいいのですが、ナース。次にヘルパーの役割をしていた唯一の弟子の偏澄。良寛を山の五合庵から平場に降ろし、それから丸ごとケアをしてくれる家を探し木村家に移す。厚労省が言っている「早めに住処を変える、在宅での看取り」を偏澄がやっていた。次に家族の代表の弟の由之。その人たちと木村家夫妻の5人。この絵に医者はいない。良寛は医者とも付き合いがあったがこの段階



で医者がこのこ出てくるようなことはない。こういうことが江戸時代の新潟の寒村で作られていた。介護保険が出来て17年、ケアマネージメントをやっているが、これに勝るものがあつたであろうか。警女と良寛を通して越後でなければ生まれにくかった情景を紹介しました。

沖藤 日本一のほら吹き男と言われたこぶし園の前園長で急逝なされた小山剛さんの後を受け、現在のこぶし園の総舎施設長の吉井靖子さん。小山さんは特養改革に取り組んできた。その狼煙の上げ方をこぶし園隊という芸達者な皆様が披露します。

こんなところ！
と言われた施設を解体！

(こぶし園隊の寸劇パフォーマンス)
吉井 33年前自然環境の良いこぶしの花がいっぱい咲く長岡市の郊外に100名定員の特別養護老人ホームこぶし園が創られた。当時は4人部屋。長岡市以外にも入所があつた。自宅で介護が出来なくなつた時に施設を使わざるを得ず入所する。介護の方は楽になるが普通の生活が途切れる。暮らしていくには非常に不便。家族も歩いては来られないところ。入所者を生まれ育つた地域に戻してあげようという思いで運営し、2本柱でやってきた。前小山園長が利用者の家族から「こんなところに入れたくない」と言われた一言がきっかけで、31年をかけて特別養護老人ホームこぶし園の100名の全てを地域に戻すことができた。

24時間365日の連続したサービスを提供

吉井 サポートセンター構想は施設の機能を地域に展開すること。施設に入所しなくても施設と同じようなサービスが自

宅や地域で受けられる仕組み。24時間365日の介護サービスが必要になる。こぶし園はサポートセンターを長岡市内に18か所で地域社会が一つの施設、道路が廊下、自宅が居室という考えで運営をしている。テレビ電話、タブレットを活用して介護、看護、医療の連携を展開している。

袖井 それぞれ素晴らしい実践を報告いただいた。今までどんな困難にぶつかったか、どうやって解決したか、伺いたい。河田 私は困難を感じたことがない。限られた人しか来ない居場所にならないよう、助け合いを次へとつなげていきたいからいくつかのルールやマナーがある。来られた方同士で助け合っているような仕組みを創っていききたいと思っている。黒岩 貞心尼は明治5年、74歳で亡くなっている。2人いた弟子の尼僧が看取った。「医療の心の原点と看取りは地方文化である」とは、仙台で故岡部健先生が言っている。地方の文化に根差した看取りをやればよいのだと提唱し寺や山の神や日本の地方文化にある自然との交わりを大事にしていくことを提案している。

吉井 小山前園長が一番苦労されたと思うが、ここまでやれたのにはバックに理事長の理解が大きかったと思う。「小山さんだからできた」という声を聞くが、たぶん前園長は「田舎の施設長がやって



きたのにできないわけがない。できないのではなく、したくないのだろう」という言葉を辛口で返したと思う。沖藤 ありがとうございます。シンポジウムの締めとして、私と袖井さんが書いた詩を朗読します。

越前・越中・越後の空にや お国自慢が飛び跳ねる！

日本の誰もが考えなかったことが日本の誰もがしようとしなかったことがこの大空に輝きわたる

この知恵袋、この忍耐力、このど根性

今こそ、ここ長岡から地域の力を、日本全国津々浦々に発信しよう

地域で築く日本の医療・福祉 地域から始まる民主主義

地域から拓く日本の未来！

(鈴木千栄子／榎熊憲子・記)

第3分科会 超高齢社会を生き抜くためのICRT

コーディネーター 木村 哲也 (長岡技術科学大学准教授)
シンポジスト 吉井 靖子 (社会福祉法人長岡福祉協会高齢者総合ケアセンターこぶし園総合施設長)
松田 利浩 (一般財団法人製品安全協会業務グループ上席調査役)
岡本 球夫 (パナソニックプロダクションエンジニアリング㈱)
新規事業推進室 新規事業推進部 生活支援ロボット課課長)

木村 ICRTは生活の豊かさや高齢社会対応への大きな動き。メーカーの立場、情報機器パッドを利用する介護現場の実際、製品安全協会(杖、車椅子、お風呂の蓋などSGマーク)より話題提供を頂き、「高齢社会を生き抜く為のICRTの利用方法」「ともに育てるには？」などを考えたい。愛知万博(2005)のロボットデモンストレーションは安全性を考える転機となった。経済産業省を中心に目玉産業化への取り組みがある。

階へ移動も可能。ユーザーと共に使い勝手を進化。離床アシストベッド「リシヨーン」はベッドの一部を切り離し車椅子に変形。(寝たきりにならず)口数が増えたという声も。国際規格ISO13482認証を取得。

吉井 厚生労働省研究事業で病院と同機能を地域で展開する為のテレビ電話を導入し在宅用ナースコールに。災害時の安否確認にも使える。経済産業省研究事業や地域包括ケアを見据えた在宅医療連携拠点事業訪問介護にタブレットを導入し情報共有を強化。訪問先の実施内容を全てレシートで出力、提出。事業所での再記録不要。カメラ機能で患部の症状を送信、入力情報で離れて暮らす患者の家族へもその場ですぐに連絡が可能。タブレット使用への苦手意識のあったヘルパー

さんも2、3日で使いこなし、新たな機能や改良点を提案しその都度バージョンアップしている。記録業務が月に450時間短縮。地域連携システム構築に向けて他の法人にも拡大したい。

松田 社会的コンセンサスにより安全規格は文書化したもの。信頼できる機関の証明でより安心。介護ロボットを社会的に育てる為、安全、安心、規格、認証基盤を理解して欲しい。

木村 介護現場は個別性。製品化には時間とコストも必要だが安全の判断基準を参考に賢い消費者として介護ロボットを育てて欲しい。

参加者 介護施設で高度な先進技術利用は求人にも有利。リシヨーンを問い合わせたい。参加者 自立生活の為のロボット理解、高齢者の犠牲予防には安全認証機関が大切。

松田 インターネット上の事故情報収集制度で安全規格バージョンアップも可能。

木村 自分はロボットを創る側にいる。今後は賢い消費者の為に社会制度を整えていきたい。(池田能子/江口郁子・記)